

《第9回国際日本学シンポジウム報告7》

ウィリアム・アンダーソン・コレクション再考

彬子女王*

はじめに—アンダーソン・コレクションとは

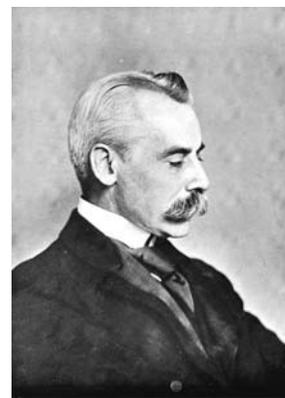
大英博物館所蔵の日本美術の作品を博物館のデータベースから検索し、形態によって分類すると、総計約2万9000点を数え、4000点の絵画、1万点以上の版画といった、広い意味での絵画作品が全体の半分以上を占め、蒐集の中核をなしていることが見て取れる。(表1)本論稿は、この絵画コレクションの核となった、1881年に大英博物館に所蔵された3000点に上るアンダーソン・コレクション研究を根底に置き、そのコレクションを初めて調査した日本人である古筆了任(1875-1933)を取り上げて論を進めたい。コレクター個人ではなく、そのコレクション自体に焦点を当てた「コレクションの歴史」を明らかにすることにより、アンダーソン・コレクションが、その永遠の住処となった大英博物館にどのような影響を及ぼしたかを検証を試みるものである。

ウィリアム・アンダーソン William Anderson (1842-1900) (挿図1)は、ロンドンの国会議事堂の対岸に建つセント・トマス病院で外科研修医兼解剖学実験授業の助手として働く医師であった。しかし、1873年、明治政府の命により、ロンドンを訪れていた寺島宗則(1832-93)によって、新しく設立された帝国海軍医学校・海軍病院の解剖学と外科の教授に任命され、約6年間をいわゆる「お雇い外国人」として日本で過ごすこととなった。アンダーソンが日本滞在中に取り組んだ脚気の研究や、西南戦争期のコレラ防疫運動が

日本の医学界に残した功績は大きく、学生の指導や患者の治療面でも高い評判を得ていたことが知られている。

表1 大英博物館日本美術コレクション内訳概数

絵画	4,000
版画	11,000
画本	2,300
陶磁器	3,500
金属器	2,450
根付	2,300
漆器	870
石器	450
染織品	270
彫刻	150
武具(刀剣・鎧等)	300
その他	1,400
合計	29,000



挿図1 ウィリアム・アンダーソン

*オックスフォード大学大学院 博士課程

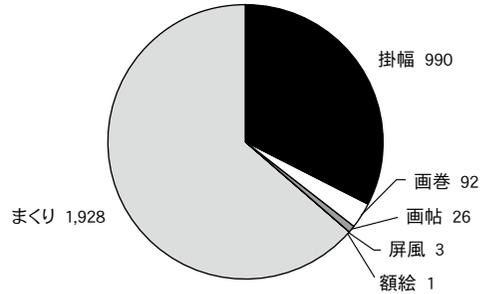
医師としての仕事の傍ら、アンダーソンが情熱的に蒐集したのが中国・日本の絵画であった。彼は約6年間の日本滞在中、3000以上に及ぶ絵画作品を蒐集し、英国帰国後の1881年、そのコレクションのほとんどを大英博物館に売却した。3000ポンドで購入された3000点近いアンダーソンの日本絵画コレクションは、大英博物館にとって初めてのまとまった数の日本絵画であり、これは現在でも拡大を続ける日本美術コレクションの基礎を築くこととなった。当時の3000ポンドは現在のレートに換算すると、約29万ポンド、日本円にすると約6700万円となる。¹大英博物館にとって、極東の小国の絵画を高額で購入することが大きな決断であったことは間違いない事実と言えよう。

そのコレクションの内訳は、986点の掛幅、95点の画卷、12点の画帖、3点の屏風、そして残りはまくりの作品で3040点が存在する(表2)。²表3で確認できるように、アンダーソンはあらゆる分野の絵画を蒐集しており、コレクションには数多くの異なった画派の絵画が含まれている。アンダーソンは、周文や雪舟といった室町時代の水墨画は雪舟派として別に分類しているが、巨勢金岡、文人画、南蘋派など、中国絵画の影響のある画家たちをまとめて‘Chinese School’(中国派)と称している。表3はアンダーソン著作のカタログの分類方法にそって、筆者が分類し直したものである。全体の内訳は狩野派が一番多く、全体の23.6%を占めており、中国派、浮世絵、円山四条・岸派と続く。時代別には、江戸時代後期の作品が多く、平安、鎌倉、室町時代の作品はほとんど含まれていない。

アンダーソンはこのように各分野の作品を平均的に蒐集する傾向があり、狩野派の作品が他に比べてやや突出している以外は、その数に特に大きな差は見られない。遠藤望氏が指摘されているように、アンダーソンは日本美術史を体系として例示できる作品の蒐集を行っており、また時代背景

も関係したその蒐集方法は極めて博物学的である

表2 アンダーソン・コレクション 形態別内訳

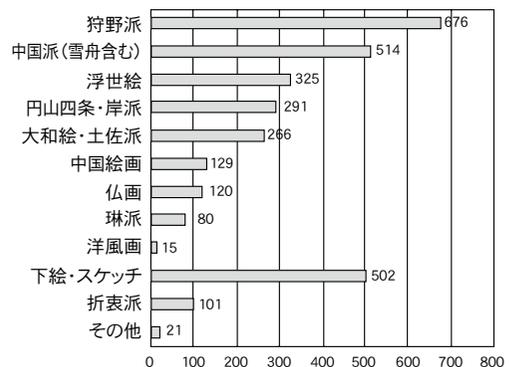


といえる。³

3000点にも及ぶコレクションを作り上げるために、日本美術史の概念がまだ確立していなかった当時の日本で、アンダーソンは広範な調査を行わなければならなかった。そこでアンダーソンは、著作の参考文献として画人伝や画論など邦語資料を同時に蒐集、活用したようである。⁴当時日本美術史全体について言及した文献は、未だ邦語でも欧語でも出版されておらず、彼がこれらの書物と作品を通して一から日本美術史の研究を進めなければならなかった状況がうかがえる。

この研究の集大成といえるのが、このコレクションを基にまとめられ、1886年に出版された*A Descriptive and Historical Catalogue of a Collection*

表3 アンダーソン・コレクション 画派別内訳



of Japanese and Chinese Paintings in the British Museum (『大英博物館蔵日本・中国絵画カタログ』)と*The Pictorial Arts of Japan* (『日本の絵画芸術』)である。1896年に*The Pictorial Arts of Japan*は翻訳され、美術史が確立していなかった当時の日本では画期的なものであると評価された。また、アンダーソンは1892年に設立されたロンドン日本協会の初代理事長に就任した。そして、自身のコレクションの展覧会への出品のほか、日本美術関係の講演の際は常に議長を務めるなど、英国での日本美術紹介のために尽力した。1900年に死去するまで理事長の任にあり、日英関係の発展に努めた功績により、1895年には勲三等旭日中綬賞を授与されている。

大英博物館における日本美術研究—古筆了任の事例を中心に

大英博物館における日本美術研究の権威でもあったアンダーソンの死は、大英博物館にとってそのコレクションに対する礎を一つ失ったということでもあった。しかし、その反面、コレクターを失い、ようやく大英博物館はその価値についての正当な評価を下す機会を得たとも言えるかもしれない。日本美術の専門家が不在であった当時の大英博物館で、アンダーソンの日本絵画研究の意義は大きなものであった。この研究が抜きん出てしまっていたがために、それ以上の研究を深めようとする人物が出てこなかったのである。アンダーソンの死去により、館所蔵の日本絵画作品はどういったものであるのか、改めて認識しようとする動きが出てくるのは自然な流れであった。

また、1890年代後半から1900年代は、芸芸員であったローレンス・ビニヨン Laurence Binyon (1869-1943) の尽力によって、日本美術のコレクションが急速に発展を始めている時期でもあった。ビニヨンは1894年から版画・素描部に勤務し、浮世絵版画や日本絵画の蒐集に情熱を傾けた。20年ほどの間に個人蒐集家の浮世絵・日本絵画の

コレクションを合わせて3000点以上購入し、また作品の寄贈も積極的に働きかけている。1908年の*Paintings in the Far East* (『極東の絵画』)に代表される日本美術関係の本を、次々と出版するなど研究者としても積極的に活動し、1913年には版画・素描部の中に創設された東洋版画・素描支部の部長に任命されている。

このように日本美術コレクションが拡大する中、課題となってきたのが既存の日本美術コレクションの見直しであった。その見直しの一番大きな対象がアンダーソン・コレクションだったのである。そこで大英博物館は、アンダーソンの死から2年後、江戸時代より続く古筆鑑定の名家、古筆家分家十五代古筆了任にその調査を依頼した。

古筆の英国滞在大英博物館への雇用については、小山騰氏が『達人たちの大英博物館』⁵の中で触れているが、その活動の詳細についてはこれまでそれほど知られてこなかった。そこで本論では、古筆了任の英国における活動を明らかにしながら、古筆のアンダーソン・コレクション調査が大英博物館の日本絵画研究にもたらした影響について検討していきたい。

伝統ある古筆家最後の当主でありながら、古筆了任の伝記は殆ど知られていなかったが、調査により、了任が東京帝室博物館の美術部に1895-1903年(明治28.1.25-36.12.2)まで勤務していたことが判明した。東京国立博物館所蔵の「東京帝室博物館重要雑録」の古筆の雇用に関する記事によると、1901(明治34)年5月、ヨーロッパにおける美術及び美術工芸の発達状況の研究、そして博物館に関する実況調査のために1年間英・仏・独・伊4カ国を在職のまま私費洋行したいという願い出を提出し、その願い出が受理されたことが述べられている。帝室博物館としても鑑識に通じた古筆が諸国を歴訪し、見聞を深めることは博物館にとっても有益であるので許可したことが記載されている。⁶また雇用記録には、古筆が1900(明治33)年2月から1年間パリ万国博覧会出品古美

術品整理事務の任についていたことが記されており、その際にヨーロッパにおける美術、博物館の調査に興味を持ち、ヨーロッパ行きを希望するに至ったであろうことが推測される。渡欧許可が下りた古筆は、1901年7月10日に1年間の予定で日本を出国する。古筆の名前が最初に大英博物館の議事録に見られるのは翌1902年3月である。これにより、まずフランスに滞在し、1902年の始めあたりにロンドンに移動したと考えられる。

渡欧後の古筆の生活が垣間見られるのが、東京国立博物館蔵の古筆による帝室博物館の久保田主事宛の私信である。消印がロンドンの1902年5月29日付の書簡には、古筆の慣れない外国での苦勞が綴られている。

〔前略〕御承知の通り是迄更に外国語心得不申候故、万事研究上観察上不便一方ナラス。去リトテ通弁ヲ依頼スルコト非常ニ費用ヲ失シ可申候間、先ABCヨリ相初メ申候。次第語学ノカタハラ研究仕候。本日迄無益ニ時間ヲ費ヤセシ如クニ御座候得共、聊カ欧羅巴ニ於ケル美術の致味ヲ解スル迄ノ端緒ヲ得申候。是全ク御蔭ヲ以テ有難存居候。コレ迄何ヲ申モ御報告スル事ヲ得ズ唯々博物館及

美術館の陳列品ヲ見ルニ止マリ、更ニ何ナルヤ、見レドモ読メズ、聞ケドモ分ラズ、殆ド困果却仕候。(後略)』⁷

しかし、この後の記載ではヨーロッパの大家の画跡の優劣の区別は幾分つくようになったこと、ギリシア、ローマ、エジプトの彫刻や、ペルシヤ、イタリアの陶器等も大略がわかるようになったことなどを述べていることから、古筆がおそらくルーヴル美術館、大英博物館等を訪問したことがうかがえる。⁸

まさにその苦勞続きの生活の最中であつたと思われる1902年3月、古筆了任は大英博物館からアンダーソン・コレクションの調査を依頼され、実施している。大英博物館の理事会の議事録の1902年3月8日の記事には、過去15年間版画・素描部に入った中国・日本の掛幅の目録化、1886年に出版されたアンダーソン・コレクションのカタログに補注と訂正を入れることを「日本の古画の専門家」である古筆に依頼したとあり、日給は1ポンド、25ポンドを最高に3-4週間の雇用期間であつた。⁹

また、6月には1897年に他界した大英博物館の



挿図2 無款《猿の草紙絵巻》室町時代末期 紙本着色 30.9×1329.4cm 大英博物館

イギリス中世美術部部長オーガス・ウォラストン・フランク Augustus Wollaston Franks (1826-97) の遺贈品の選択を依頼されている。議事録には、フランクが作品を適格な専門家に見せ、版画・素描部にふさわしいものは理事会に献上し、残りはフランクの遺言執行人に返還することを望んでいたと記載されている。そこで古筆は、フランク・コレクションから41点の画卷、26点の画帖、多数の古典的な日本画家の作品の模写を選出した。¹⁰版画・素描部に残る報告書には、15世紀の土佐派の女性画家飛鳥井一位局の作とする《猿草子絵巻》(挿図2)、四条派の画家西山完瑛による《浪花風俗図巻》、土佐光成筆とする《源氏物語絵巻》などが特に優れているといった、古筆による詳細なコメントが記されている。¹¹

大英博物館関連の資料の他にも古筆の英国滞在時の活動を窺うことのできる資料がいくつか存在する。作家であり、熱心な日本美術蒐集家でもあったアーサー・モリソン Arthur Morrison (1863-1945) は1911年の著作*The Painters of Japan* (『日本の画家達』) の緒言で古筆の名を言及している。協力・助言者への謝辞の中で、古筆が一番始めに挙げられているのである。この本は、*Monthly Review* という美術関係の雑誌に掲載されたモリソンの同名の論文を元に執筆されたものである。6月に依頼されたフランク・コレクションの調査後、もしくはその最中の1902年7月号から1903年1月号に掲載されており、この論文執筆に古筆が協力を行っていたであろうことが推測できる。

1903-1906年まで英国に留学した英文学者の平田禿木 (1873-1943) は、モリソンが大英博物館に出入りしていた古筆を秘書として『國華』などの日本の出版物を研究していたことを記している。ここから古筆は私的にモリソンの日本絵画研究を補助しつつ、大英博物館の版画・素描部でピニヨンらと交流を持つ過程で雇われるに至ったと考えられる。¹²ピニヨンは著作*Painting in the Far East* の緒言で、「古筆は個人的な交際を通して、

その素晴らしい知識の蓄えや優雅な鑑定眼から必要なものを教えてくれた」と惜しめない賛辞を送っている。¹³

また、古筆は日本美術品のコレクションの質、量ともに大英博物館と並ぶ規模のヴィクトリア・アンド・アルバート美術館とも関わっていたことも判明した。当時のV&Aの木版画担当の学芸員であったエドワード・ストレンジ Edward Strange (1862-1929) が、著作*Japanese Illustration* (『日本の挿絵』) 第2版の中で、古筆の援助のお蔭で初版の内容を再検討し、新しい根拠を挙げる事が出来たと述べている。¹⁴

ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館のアーカイヴには、1902年4月29日の記事に、ストレンジから古筆を日本語翻訳等のために雇用したい旨の願い出が送られており、日付はわからないものの、翌1903年にも、日本絵画目録の翻訳のために更に6日間の雇用の推薦がなされている。¹⁵当雇用に関する詳細は破棄されて現存しないが、この記録から、1903年に入っても古筆は翻訳等の仕事をヴィクトリア・アンド・アルバート美術館で継続して行っていたことが明らかとなった。

このように、ロンドンで数多くの仕事を請け負うことになった古筆は、日本美術に関わる主要人物達と交流を深めた。しかしながら当初の1年という期限は瞬く間にやってきてしまったのである。そこで、古筆は帝室博物館に滞在期間の延長を願い出る。明治35 (1902) 年8月12日付の帝室博物館重要雑録には、古筆が期限内に調査を終えることが出来ず、独伊両国の研究のためもう1ヶ年の滞在期限の延長を申し出てきたことが控えられている。この申請を受け、博物館側は様々な事情を鑑みた上で、1年に限り滞在の延長を許可したと記されている。¹⁶これらの史料を総合すると、古筆のイギリスでの滞在は1902年から1903年に渡る、1年以上の期間であったことが推測できる。おそらく古筆は、帰国直前の数ヶ月間で残りのドイツ、イタリアを巡ったと思われる。そし

て、1903年7月末に日本に帰国している。

古筆調査とアンダーソン・コレクション

以上が新出の史料から知りえる限りの古筆のロンドン滞在時の活動である。ここからは、本論稿の本題である古筆によるアンダーソン・コレクションの調査に焦点をあて、古筆の調査が大英博物館にどのような変化をもたらしたかを検討したい。

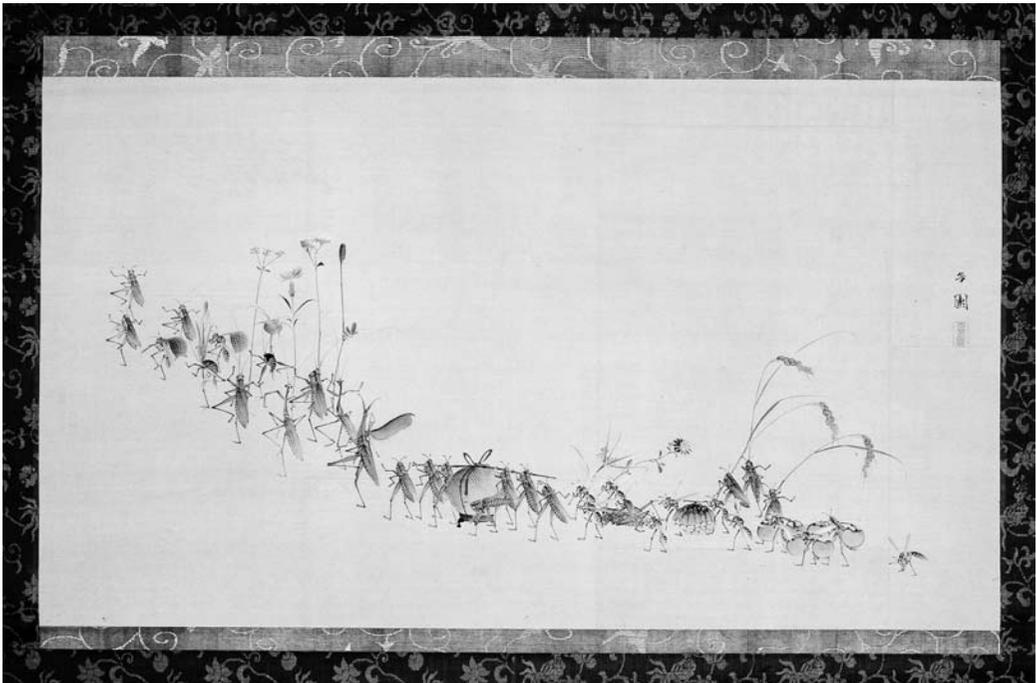
そこで注目したいのは、現在大英博物館の日本部所蔵の2冊に分割されたアンダーソン・カタログである。1886年に出版された従来のアンダーソン・カタログの各ページの間と各章末に罫線入りのページが挿入され、作品の隣のページに「贋作」「珍しい作例」などといったコメントや画家の名前、時代といった情報が手書きで記され、2冊に再製本されている。

例えば、「大変素晴らしく、珍しい作例」と評

されている西山芳園筆の《虫行列図》(挿図3)、アンダーソンがただ名前だけ“Ranko”としていた作家の姓を「よい作例。中井藍江筆」と明らかにした中井藍江筆の《駱駝図》、「署名落款は偽物、応挙のスタイルではないし、アマチュアの作のようである」と評されている円山応挙筆《宇治鳥瞰図》などがある。

この再製本カタログは、大英博物館の代々の学芸員が参考書として利用してきたものだが、編纂が誰の手によるものなのか、いつごろ編纂されたのか等の詳細は不明で、極めて不可解なものとしてとらえられてきた。今回の調査でその謎を解く鍵がどうやら古筆にあることが明らかとなった。

古筆がアンダーソン・コレクション等の調査を行ったと思われる1902年4月から5ヵ月後の9月1日、版画・素描部の報告書には、部が所持するアンダーソン・カタログにページの挿入と再製本の準備が整ったとの報告があり、そして、翌年1月1日には訂正・補注の作業が完成したとの報



挿図3 西山芳園《虫行列図》江戸時代後期 絹本着色 49.2 x 86.1cm 大英博物館

告を確認することもできた。¹⁷このカタログが手書きのコメントが書き加えられた先述のカタログであり、コメントが古筆の調査結果に基づくことはおそらく間違いないと考えられる。そして、この再製本カタログには、1902年の古筆の調査以前に入っていた作品は勿論、調査後から1913年までに購入された日本絵画総計255点が新たに掲載されている。

1913年に東洋版画・素描支部が独立し、独自の日本絵画専用の登録簿を使用するようになるまで、日本絵画や版画、陶磁器、漆器といった作品は版画・素描部や民族学部等の登録簿に西欧の作品と共に記録されていた。様々な国の作品が雑多に記録された登録簿では、日本絵画作品の全容を把握するのは難しかったことだろう。そこで検討されたのが、既に出版されているアンダーソンのカタログを再編纂し、引き続き日本絵画の作品リストとして再利用することだったと推測できる。つまり古筆の調査に際して、博物館蔵の日本絵画作品をまとめて把握するための作品リストの制作が試みられたのである。

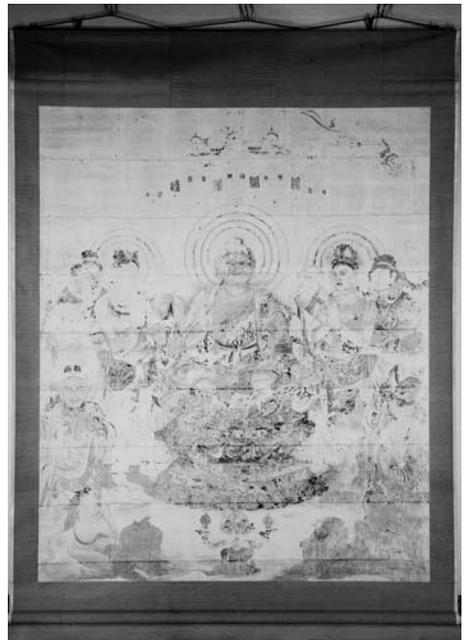
古筆の痕跡は、再製本本のそこかしこに見受けられる。漢字の記載、真贋や作品の価値判断、画家の説明など、当時の英国人では知りえないような情報が含まれている。書き添えられた漢字はその稚拙さから古筆の手によるものとは考えられないが、おそらく古筆が残したメモ書きのようなノートを元に、版画・素描部の学芸員が書き写したものであろう。

古筆メモから詳細が明らかになった一例としてアンダーソン・コレクションの法隆寺壁画の模写が挙げられる。薄紙をつないで製作された高さ3メートルを越える巨大な作品は、1943年の火災で焼失した法隆寺金堂第9号壁《弥勒浄土図》の模写である。(挿図4) 再製本カタログには“traced, probably by Sakurai Koun” とのコメントが書き加えられている。桜井香雲(1840-95?)は、復古大和絵系の画家田中友美の門人で、画塾を出

た後、按摩を業としながら全国を遊歴していたが、



挿図4 伝桜井香雲《弥勒浄土図模写》明治時代初期 紙本著色 310.0×248.0cm 大英博物館



挿図5 桜井香雲《法隆寺金堂壁画弥勒浄土図模写》明治時代 紙本著色 312.3×264.3cm 東京国立博物館

友美の推薦により、1884（明治17）年、皇室博物館に保存するための法隆寺金堂壁画の模写に携わったことが知られている。挿図5の東京国立博物館所蔵の模写がその際の作品である。香雲が模写に携わっていたことを当時の英国人が知っていたとは考えにくく、このコメントが古筆によるものであることは間違いないと思われる。

大英博物館蔵の模写はアンダーソンが駐日英国公使アーネスト・サトウ Ernest Satow（1843－1929）から譲り受けたものである。サトウの日記にはサトウとアンダーソンが1879年12月8日共に法隆寺を訪れたとの記述がある。¹⁸この訪問の際、二人は曼荼羅等の伝来の御物を見ているが、壁画に関する記述は日記上には見受けられない。しかし、1884年の『東洋絵画叢誌』に手がかりとなる記述がある。法隆寺の壁画に関する記述の中で、

「大和国法隆寺金堂なる壁面の仏画は僧曇徴筆にして（中略）先年英国人[サトウ]氏が京都に遊びし時此畫を一見し、万国無二の物なりとて痛く賞賛され、西京の画家桜井耕雲氏（今大阪府博物館御雇）に写方を囑托せし所、氏は種々の工夫を凝らし細大残らず写取りて之を送られ、其後更に此畫を写して博物局へ献じ御備品となりしは、今度其筋より此壁面の畫大三ヶ所小八ヶ所都合十一ヶ所を写し取るべき旨を大阪府に命ぜられしかば（後略）」¹⁹

との記載がある。つまり、1879年の訪問時かどうかは定かではないが、壁画に感銘を受けたサトウは香雲に模写を依頼し大英博物館所蔵の模写が制作され、以後香雲はもう一度壁画を写して東京国立博物館所蔵の模写が制作されたというのである。よく知られている1884年の香雲の模写作業の端緒となったのが英国人のサトウの発願であったというのは、大変興味深い事実と言えるのではないだろうか。²⁰

おわりに

本論稿は筆者のコレクション研究の一環として、コレクターであり日本美術研究者としてのウィリアム・アンダーソン死後のアンダーソン・コレクションに焦点をあてるという試みである。そして、今回はアンダーソン・コレクションを最も早い時期に再考した人物である古筆了任の活動を取り上げた。一大コレクションを作り上げたコレクターが他界し、日本美術の専門家も不在であった19世紀初頭の大英博物館で、日本の古画鑑定の名家に生れた古筆の知識はかけがえの無いものと歓迎された。

結果的に、大英博物館の日本コレクションは、古筆の調査の後、アンダーソン・コレクションに不足する作品を補填する方向で拡充された。そして、古筆の鑑定を元に製作された2冊の再製本カタログは後々の学芸員達のよい教科書となり、今日に至っている。また、1913年以降に東洋・版画支部で作品を整理し、新しく登録番号を付けた際、古筆が贋作として判断した作品群には新たな番号が付けられず、“Oriental Cabinet no.1”と予想される“or.c.1”と言う番号が付けられた。今では改めて番号が付けられているこの贋作群は、しばらくの間まとめて1ヵ所に保存されていたと考えられる。こういった事実からも古筆の意見の重さが感じられるだろう。

また、ピニヨンやストレンジが古筆の援助を得て出版した数々の著作は、イギリスの日本美術研究が古筆の知識や経験により大きな飛躍を遂げた証拠とも捉えることが出来るだろう。英国において、古筆了任がアンダーソン・コレクションの価値を始めとする日本美術の意義、真意等を知らしめた功績は、おそらく本人が意図した以上のものがあったように思われる。また、本論では紙面の都合上、古筆のフランス、ドイツ、イタリアにおける活動まで追う事は出来なかったが、古筆の英国以外での活動の詳細が明らかになれば、20世

紀初頭の西欧での日本美術研究における古筆了任の役割がこれまでの予想以上に大きなものであった可能性も生まれてくるかもしれない。

これまでのウィリアム・アンダーソン研究は他のコレクター研究同様、アンダーソン個人の伝記的研究にとどまっていた観が否めない。つまり美術コレクター研究はコレクターの死という時間的制約に常に縛られてきたとも言える。しかし、アンダーソンの死後もアンダーソン・コレクションはその形を変えることなく大英博物館にあり、イギリスにおける日本美術研究に少なからぬ影響を与え続けてきた。コレクターではなくコレクション自体を研究対象とすることで、古筆了任の活動や、法隆寺壁画の模写といったこれまで注目されることのなかった事実の存在が少なからず判明した。アンダーソン・コレクション以外にもその原型をとどめるコレクションは数多く存在する。そういったコレクション研究を通して、時代ごとの日本絵画に対する認識、ひいては西洋における日本美術関心の変遷もまた見えてくると言えるのではないだろうか。

〈追記〉

本論稿執筆に当たり、調査にご協力いただきました東京国立博物館の湊信幸氏、松原茂氏、高橋裕次氏、富田淳氏、大英博物館のティモシー・クラーク氏、ロジーナ・バックランド氏に紙面を借りて心より御礼申し上げます。

【注】

- 1 Measuring Worth. Comを利用して算出した値を、1ポンド230円として計算した。
- 2 これは、1882年のコレクション受け入れの際の調査の結果の総数3324点、アンダーソンのカタログに掲載されている2919点とは異なるが、フランクスが1881年11月8日付の館長宛の書簡に、もしカタログが出版される場合には取り除いておいた方がいい作品がいくらかあると述べていることから、カタログに掲載されなかった、もしくは購入されなかった作品が存在したからだと考えられる。
- 3 遠藤 (1992) p.19.

- 4 Anderson (1881-1) Preface.
- 5 松井・小山・牧田 (1996) pp.175-179.
- 6 当館雇 (月棒拾四円) 古筆了任儀、美術及美術工芸之沿革及発達ノ状況ヲ研究シ、兼テ博物館ニ関スル実況調査の目的ヲ以テ往復共向一ヶ年ヲ期シ、英仏独伊ノ諸国巡回致度ニ付、在職ノ儘私費洋行之儀、別紙之通願出有。之右本人儀ハ兼テ美術上ノ鑑識ニ通達致居、後來博物館之事業ニ就テハ有用ノ才ニ有、之前記諸国巡歴之儀ハ一層本人之檢分ニ資益シ、随テ当館々務上便利ニモ相成候ニ付、願意ヲ聽許シ洋行中ハ現俸給ヲ交付致シ可然哉此段、相伺候也。(句読点筆者。旧字体は新字体に置き換えた)「東京帝室博物館重要雑録」明治34年
- 7 古筆了任書簡 東京帝室博物館久保田主事宛 (東京国立博物館所蔵)
- 8 「(前略) 今日ト雖モ猶同然ニ御座候得共、絵画ノ流派トカ及大家ノ画跡ニ付其区別ト優劣等ノ趣味ニ於テ幾分ノ見識ヲ得申候。コレ眼目ニ慣レタルモノト存ジ候。彫刻モ僅カニ「グリーキ」及「ローマ」エジプト」ノ形姿 (ママ) 模様或ハ羅馬ノ古銅器「バルシヤ」ノ陶器「イタリー」ノ陶器ノ大略ヲ解スル迄ニ相成申候。コレ誠ノ大体ニ止リ、到底其一部ト雖モ是レヲ短日ニ研究センハ事難ク候得共、日本美術に比較的觀察シ僅ニ記憶ニ存シ申候。(後略)」「東京帝室博物館重要雑録」明治34年
- 9 Minutes of the British Museum Trustees. 1623 8 March 1902
Ordered: Application for treasury sanction for temporary employment of Mr Kohitsu on Japanese drawings
Read a report by Mr Colvin, 1st March requesting authority to employ Mr R Kohitsu: a Japanese expert in old paintings, to catalogue the Chinese and Japanese kakemonos acquired by the Department of Prints and Drawings during the past 15 years and to make notes and corrections in the catalogue of the Anderson collection [published 1886 and now out of print]
Mr Kohitsu's remuneration to be £1 a day and the total cost not to exceed £25 the work being expected to occupy from three weeks to a month.
The Trustees approved: and directed that application be made for Treasury concurrence.
- 10 Minutes of the British Museum Trustees. 1698 14th June 1902
Reported: Selection of Chinese and Japanese drawings from the collection of Sir A. W. Franks.
Read a report by Mr Colvin, 6th June, announcing

the selection, on the advice of Mr Kohitsu (c. 1638), for incorporation in the departmental collections, of a number of Chinese and Japanese makimono etc. included in a collection formed by the late Sir A. W. Franks and placed by him in Mr Colvin's hands some years ago, with and expressed wish that the series should be examined by a competent expert; such items as might be considered desirable for the Department of Prints and Drawings to be retained as gift to the Trustees, and the rest returned.

The selection now made for the Museum comprised 41 makimono (38 paintings and 3 woodcuts), 26 albums (23 of paintings and 3 woodcuts) : and numerous traced copies from works of classical Japanese painters of the earlier school.

The Trustees authorised Mr Colvin to accept the selected items and to return the remainder to Mr Read, Sir S. W. Franks' executor and residuary legatee.

- 11 Report of the Prints and Drawing Department, 1902, British Museum
- 12 松井・小山・牧田 (1996) p.176
- 13 Binyon (1908) Preface.
- 14 Strange (1904) Preface to Second Edition.
- 15 V&A Archive RP/1902/14773
Date: 29/04/1902
Correspondent: E. F. Strange
Abstract: Suggests employment of Mr. R. Kohitsu on Japanese Translations &c
V&A Archive RP/1903/7293
Date: 1903
Correspondent: G. H. Palmer
Abstract: Recommends employment of M Kohitsu for further period of 6 days in translations for Catalogue of Japanese Drawings
- 16 当館雇 (月俸拾四円) 古筆了任儀、昨年中欧州ニ於ケル美術ノ沿革及状況ヲ研究シ、兼テ其博物館ニ関スル実況ヲモ調査之為向老ケ年ヲ期シ、御暇ヲ得テ英仏独伊諸国巡回ノ件、別紙甲印写之、通裁可ヲ得乃同年七月十日当地出発、本年七月九日ヲ以テ満期相成候処、今般乙印之通旅行先ヨリ願書差越、何分許可ノ期限内ニ在テ所期ノ諸国歴查ヲ了シ難クニ付、尚ホ独伊両国研究ノタメ向フ一ケ年御暇を蒙リ度段願出有之、右ハ此際願意拒絶候得ハ折角ノ研究半途ニシテ相己之候儀ニテ、事情酌量スヘキ次第モ有之且素之本人請暇渡欧ハ帰朝後本館ノ便宜ヲモ相図リ免許候儀ニテ、且本人月俸モ少額ニ有之、今一カ年ハ用務ノ差繰モ強テ困難トスル所ニ無之ニ付、格別ノ訳ヲ以テ今一カ年ニ限り延期許可致度此段仰高裁候也。〔東京皇室博物館重要雑録〕 明治35年
- 17 Report of the Prints and Drawing Department, The British Museum
- 18 サトウ (1992) p.231.
- 19 『東洋絵画叢誌』 (1884) pp.17-19.
- 20 発表後の調査で、同様の作品がギメ美術館にあることが判明した。また、ヤスマラヨシコ氏により、便利堂により1935年制作された全12幅のコロタイプ版法隆寺金堂壁画の複製が大英博物館、ロンドン大学SOASに1セットずつ所蔵されていることが明らかとなっている。大英作品とギメ作品の関係性などについては、今後の研究の課題としたい。(Yasumura (2007) p.87)

Anderson, William. *Descriptive and Historical Catalogue of a Collection of Japanese and Chinese Paintings in the British Museum*. London, 1886.

———. *The Pictorial Arts of Japan*. London: Sampson Low, Marston, Searle & Rivington, 1886.

Binyon, Laurence. *Painting in the Far East: an introduction to the history of pictorial art in Asia, especially China and Japan*. London: E Arnord, 1908.

遠藤望「大英博物館所蔵アンダーソン・コレクション調査報告」『ジャポネズリー研究学会会報』12号 1992 pp.11-45.

松井竜吾・小山騰・牧田健史『達人達の大英博物館』講談社 1996

Morrison, Arthur. *The painters of Japan* 2 vols. London: T.C. and E.C. Jack, 1911.

Officer, Lawrence H. *Five Ways to Compute the Relative Value of a UK Pound Amount, 1830 - 2006* MeasuringWorth.Com, 2007 [cited 26/10 2007]. Available from <http://measuringworth.com/calculators/ppoweruk/>.

アーネスト・サトウ『日本旅行日記』 庄田元男訳 第2巻 平凡社 1992

Strange, Edward F. *Japanese Illustration: a history of the arts of wood-cutting and colour printing in Japan*. London: George Bell and Sons, 1904.

Yasumura, Yoshiko. "George Eumorfopoulos and the University of London". *Orientalism* 38, no8 (2007) : 86-90.